

# チャ樹炭疽病の二番茶後浅刈り更新と化学合成農薬を組み合わせたe-naおおいた減農薬防除体系（第2報）

野菜・茶業研究所

食の安全・安心に対する関心が高まる中、消費者からは化学農薬の使用を抑えた農作物が求められている。特に茶は健康飲料としての側面からも関心が高く、農薬使用量の低減は重要な課題となっている。今回は、炭疽病を抑える目的で二番茶摘採後に浅刈り更新を行い、その後の芽に対する化学合成農薬散布を組み合わせた体系防除技術を紹介する。

## 【普及したい技術のポイント】

二番茶摘採残葉に炭疽病が多発生した場合は、7月上旬までに二番茶摘採面より3cm～6cm程度の深さで浅刈りを行う。その後は、三番茶芽生育期（2～3葉期）にEBI剤（オンリーワンフロアブル2,000倍等）と秋芽が再度伸長を始める9月上旬に保護殺菌剤（コサイドボルドー500倍等）を散布する体系で秋芽の炭疽病を効果的に防除できる。

## 【二番茶後浅刈り更新の時期・深さ】

二番茶摘採後、摘採残葉に炭疽病が多発生している場合は、有効積算気温400日度（せん枝日から秋整枝までの日平均気温20以上の積算温度）が確保できる7月上旬までに二番茶摘採面より3～6cm程度下で浅刈りを行う。

浅刈り時期が300日度（7月下旬）では秋芽の充実不足で頂芽が多く、また母枝の直径が細くなり更新効果が得られない（表1）。また、7月下旬の浅刈りでは、翌一番茶収量が無更新にくらべ減少する（図1）。

浅刈り深さについては、7月上旬では、浅いほど出開きが早く収量が多くなる（図1）。

表1 浅刈り時期が秋の枝条構成に及ぼす影響

試験区	有効積算		頂芽枝数	側芽枝数	側芽枝率 %	枝の直径 mm	
	深さ mm	日度					
7月上旬	30		28.0	8.5	19.5	69.6	2.0
7月上旬	60	439	25.5	12.0	13.5	52.9	1.8
7月上旬	90		21.0	10.5	10.5	50.0	2.0
7月下旬	30		23.5	16.0	7.5	31.9	1.4
7月下旬	60	334	22.0	15.5	6.5	29.5	1.6
7月下旬	90		24.5	19.0	5.5	22.4	1.6
無更新無防除	-		30.5	13.5	17.0	55.7	1.9
無更新慣行防除	-	481	33.5	11.5	22.0	65.7	1.9

有効積算温度は最終摘採（せん枝）日から秋整枝までの日平均気温20以上の積算温度

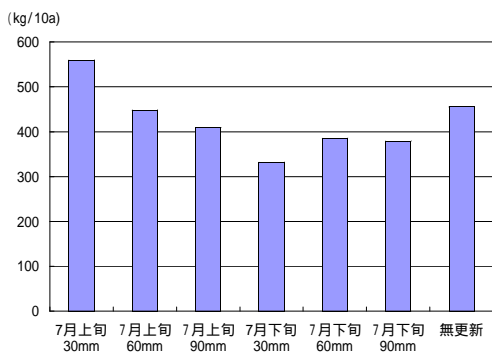


図1 浅刈り時期と深さと翌一番茶収量



二番茶摘採残葉に発生した炭疽病

## 【浅刈り後から秋芽までの防除方法】

浅刈り後、三番茶芽2～3葉期に治療効果のあるEBI剤（オンリーワンフロアブル2000倍等）を散布し、その後再度秋芽が伸長をはじめ9月上旬に保護殺菌剤（コサイドボルドー500倍等）を1回散布する体系で、秋芽での防除効果が安定する（表2）。

表2 浅刈り後の炭疽病防除効果

浅刈りの有無	散布時期	発病葉数 (枚/m <sup>2</sup> )			合計	防除率		
		萌芽～1葉期	2～3葉期					
			8月1日	9月3日			反復	
-	オンリーワン	-	0.9	6.5	4.6	12.0	69.6	
-	オンリーワン	コサイド	1.9	0.9	0.9	3.7	90.6	
-	ダコニール	-	3.7	17.5	4.6	25.8	34.7	
-	ダコニール	コサイド	2.8	1.9	1.9	6.6	83.3	
有	コサイド	-	5.6	15.7	5.6	26.9	31.9	
-	コサイド	コサイド	0.9	1.9	3.7	6.5	83.5	
-	ダコニール(7/25)	オンリーワン	コサイド	5.6	3.7	2.8	12.1	69.4
-	-	-	5.6	26.9	25.0	57.5	-45.6	
-	-	-	16.7	9.3	13.5	39.5	0.0	
無	ダコニール(7/17)	オンリーワン(7/23)	コサイド	1.9	4.6	3.7	10.2	74.2

散布濃度はオンリーワンF 2000倍、ダコニール1000 1000倍、コサイドボルドー500倍。発病葉数調査は10月10日に行った。

## 【利用上の留意点】

病害の防除の他にもチャノホソガ、チャノキイロアザミウマ、チャノミドリヒメヨコバイなど害虫の防除も併せて行う必要がある。